

【場所・面積】茨城県、0.7ha

### 【管理目的】

- 「所さんの目がテン！」（毎週日曜・朝7:00～）番組内で、里山と人との共存や、豊かな自然の恵みを広く伝える企画「かがくの里」の実施場所として管理。8年にわたり環境負荷の少ない菜園作り、森林の間伐などを行っている。

### 【サイト概要】

- 自然環境と人の居住環境が隣接する、限りなく里山の環境に近い場所。希少な水生昆虫やフクロウやムササビといった里山環境を好む生物が確認されるようになっている。

### 【サイト周辺の状況】

- 申請区域と同様の山林が続いている。

### 【土地利用の変遷】

- 元々の管理者が高齢となり、管理の継続が困難になったため、荒れ地の状態となっていたが、2014年に番組の管理が始まり、田んぼや畑などの菜園作り、森林の間伐などを行うことにより、生物多様性豊かな里山へと再生した。

### 【活動のアピールポイント】

- 人が自然に積極的に関わることで生物多様性が増す様子を、番組を通じて発信することで、環境保全や生物多様性の重要性を広く世の中にアピールしている。また、学研プラス社より「里山の生き物図鑑」を上梓しており、子どもたちの環境教育にも貢献している。

区域全体図・写真①



区域全体図・写真②



## 【生物多様性の価値、管理内容およびモニタリングの概要(1/2)】

生物多様性の価値	生物多様性の価値の概況	管理内容	モニタリング概要
<div data-bbox="66 232 639 554" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="66 786 155 846" data-label="Text"> <p>(3)</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 当該サイトは、持ち主が家庭菜園を営んでいたものの、高齢のため管理ができなくなり、荒れ地の状況になっていた。また持ち主が異なる周辺の森も、間伐などの手入れが長期間行われず、密林のような状況になっていた。そこでサイト管理者である番組は有識者指導の下、森の間伐、溜め池、水田、畑の造成を進め、里山林や水田、草地等から成るモザイク状の環境を形成した。</li> <li>➤ 管理開始当初には生物種の調査を行っていないため、この管理によって何種類の生物が増えたか特定することはできないが、以下のとおり、それぞれの生息地に特徴的な種の生息が確認されている。少なくとも、溜め池、水田、水路はサイト管理者が造成したため、下記の水生昆虫類は環境整備により集まり、増えたといえる。</li> <li>➤ 特に昆虫類では、絶滅危惧種、準絶滅危惧種のみならず、近年数を減らしている普通種の存在が豊富であることもサイトの特徴である。</li> <li>➤ 周辺の森も、密林の状態では大型の鳥類が飛ぶスペースがないため、フクロウなどが飛来することが難しい状況だった。間伐を進め、樹洞代わりに巣箱を設置したことで、フクロウの営巣が見られたのは管理に起因するものといえる。</li> </ul>	<p>森林、溜め池、水田、畑、それぞれの生態系の環境に応じた管理を進めるため、各分野の有識者の指導の下、以下のような管理を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 里山林は、京都大学大学院農学研究科の村田功二准教授の指導と地元林業家の協力のもとで間伐、下刈り等を実施し、森林整備を行う。間伐材は家具や食器、炭を作って使用している。最近ではキノコの原木栽培もおこなっている。周辺の森は植林であり、動物が営巣するための樹洞がない。そこで森の生物種の多様性を高めるため、宇都宮大学農学部守山拓弥准教授指導の下、フクロウやムササビのための巣箱を設置。観察用カメラを複数設置し、動物の生態を常時モニタリングしている。これまでにフクロウのつがいの飛来、幼鳥、ムササビの出産など貴重なシーンの撮影に成功した。</li> <li>➤ 水田と畑は、宇都宮大学農学部・高橋行継教授により年間を通して作付けの計画を立て、地域住民協力の元、農薬を使わず、化学肥料は最小限にとどめる環境に配慮した農法で作物の栽培を行っている。連作障害を防ぐため、多品種少量生産を続けている。同時に野生のニホンミツバチの養蜂も行っているため、収量も多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 番組の撮影を週に1回程度行うと同時に、周辺に無人カメラを多数設置し、24時間、生物、動物の同行をモニタリングしている。最近では、ムササビの出産の瞬間をとらえている。</li> <li>➤ 昆虫調査は株式会社地球工作所取締役・斉藤秀生氏、昆虫写真家の平井文彦氏、法師人響氏に協力を頂いている。今年の4月から6月にかけての調査において、添付資料に載っていない、200種を超える昆虫類が新たに確認、撮影された。</li> </ul>

## 【生物多様性の価値、管理内容およびモニタリングの概要（2/2）】

生物多様性の価値	生物多様性の価値の概況	管理内容	モニタリング概要
<div data-bbox="63 235 639 559" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="63 778 152 835" data-label="Text"> <p>(3)</p> </div>	<p>確認された主な生き物</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・里山林： <ul style="list-style-type: none"> <li>フクロウ（成体つがい、産卵、巣立ち）</li> <li>ムササビ（成体、出産）</li> <li>オオムラサキ（成体）</li> </ul> </li> <li>・水田： <ul style="list-style-type: none"> <li>タイコウチ（成体）</li> </ul> </li> <li>・溜め池： <ul style="list-style-type: none"> <li>ミズカマキリ（成体）</li> </ul> </li> <li>・畑 <ul style="list-style-type: none"> <li>ニホンミツバチ（成体、幼虫、卵、巣）</li> <li>オニヤンマ（成体）</li> <li>ミイデラゴミムシ（成体）</li> <li>ケラ（成体）</li> </ul> </li> </ul> <p>※ミイデラゴミムシの幼虫はケラの卵をエサとするため、2種は共生関係にある。近年ミイデラゴミムシが減っているのはケラがいなくなったためといわれている。添付資料にはケラの記載はないが、図鑑完成後にケラの成虫も確認した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 溜め池では、北里大学海洋生命科学部千葉洋明准教授指導の下、ドジョウ、ホンモロコ、ニホンウナギ等を放流。田んぼから流れ込む豊富な栄養によってプランクトンが発生するため、エサを与えずに自然循環で粗放養殖を行っており、何世代にもわたってそれぞれの種が共生、繁殖していることが確認されている。</li> <li>➤ 玉川大学農学部・小野正人教授の指導のもと、ミツバチの巣箱を設置。野生のニホンミツバチが巣を作っている。栽培している作物の豊富な花蜜を求めてハチが集まり、受粉を進めたため、ウメやスモモなどの果樹の収穫量が増し、蜂の数自体も増え続けたため春に分蜂を繰り返すなど、自然循環を繰り返している。当初1群であった群れが、分蜂によって多い時には6群にまで増える。</li> </ul>	